



岩波文庫

3640—3642

カール・マルクス

資 本 論

(一)

第一卷 第一分冊

エンゲルス編
向坂逸郎譯

岩波書店

昭和二十二年九月十日 第一刷發行
昭和二十四年十月三十日 第三刷發行

資本論 (一)
定價七拾五圓



譯者 向坂逸郎

發行者 岩波雄二郎

印刷者 山田一雄
東京都西多摩郡霞村根ヶ布三八五番地

發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋三ノ三

株式會社

岩波書店

會員番號A一〇九〇〇四號

落丁本・亂丁本はお取替いたしません

株式會社大化堂印刷・製本

岩波文庫

3640—3642

カール・マルクス

資 本 論

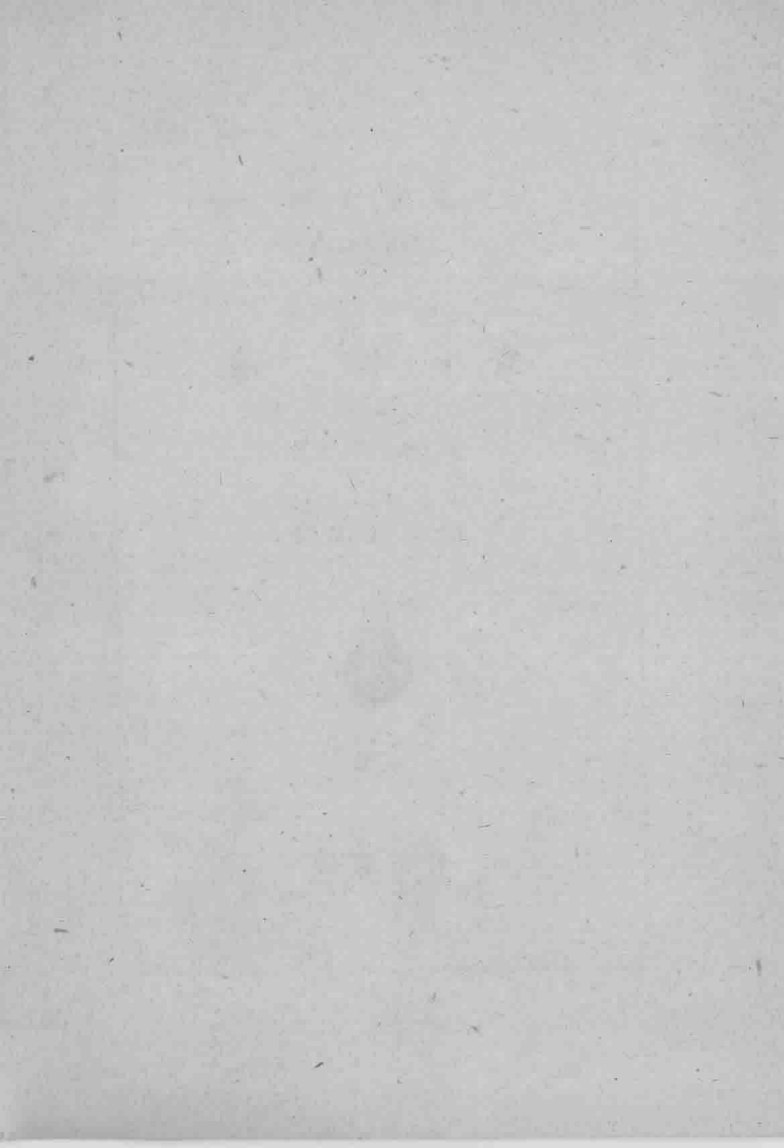
(一)

第一卷 第一分冊

エンゲルス編
向坂逸郎譯



岩波書店

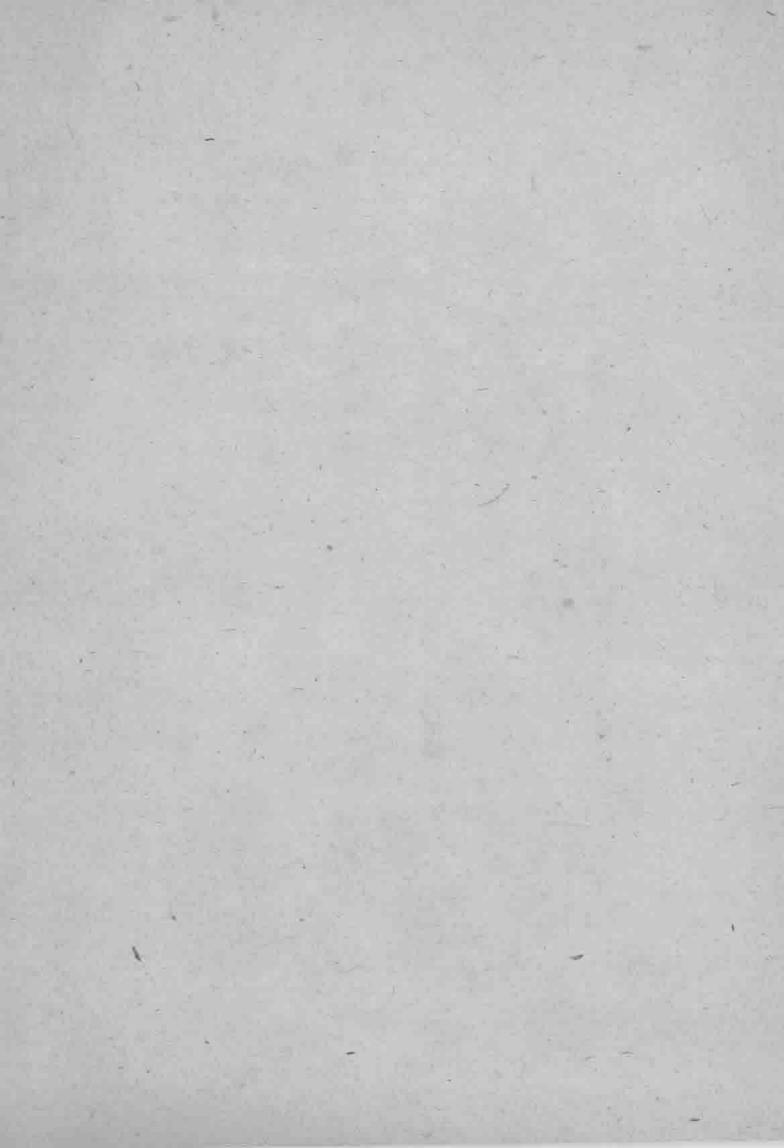


カール・マルクス著

資本論

經濟學批判

フリードリヒ・エンゲルス編纂



目次

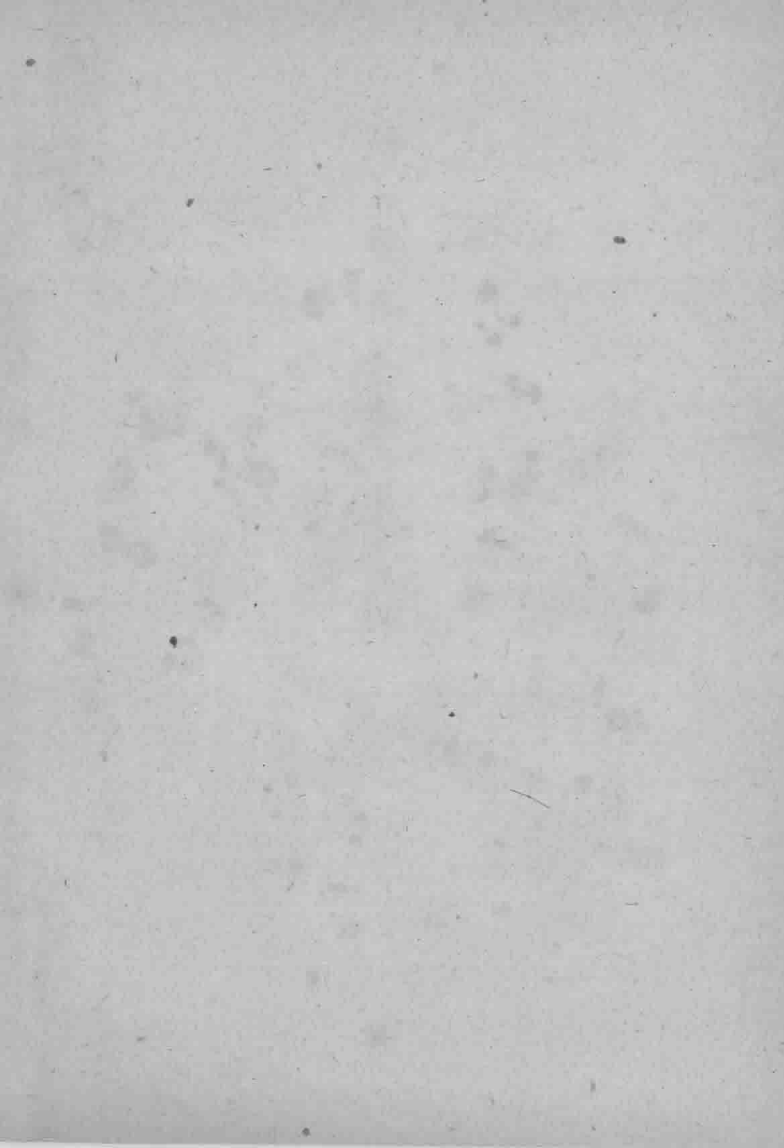
第一版の序文	一三
第二版の後書	二三
フランス語版に對する序文と後書	三九
第三版に	四三
英語版の序文	四九
第四版に	五九
第一冊 資本の生産過程	
第一篇 商品と貨幣	七三
第一章 商品	七三
第一節 商品の二要素、使用價值と價值（價值實體、價值量）	七三
第二節 商品に表わされた労働の二重性	八三

第三節 價值形態又は交換價值	九六
A 單純な、個別的な、又は偶然的な價值形態	九八
一 價值表現の兩極、即ち、相對的價值形態と等價形態	九八
二 相對的價值形態	一〇〇
a 相對的價值形態の内實	一〇〇
b 相對的價值形態の量的規定性	一〇七
三 等價形態	一一三
四 單純なる價值形態の總體	一二〇
B 總體的又は擴大せる價值形態	一二四
一 擴大された相對的價值形態	一二五
二 特別なる等價形態	一二七
三 總體的又は擴大された價值形態の缺陷	一二七
C 一般的價值形態	一二九
一 價值形態の變化せる性格	一二九
二 相對的價值形態と等價形態の發展關係	一三三
三 一般的價值形態から貨幣形態への移行	一三七

D	貨幣形態	一三七
第四節	商品の物神的性格とその祕密	一四〇
第二章	交換過程	一六三
第三章	貨幣又は商品流通	一八三
第一節	價値の尺度	一八三
第二節	流通手段	二〇一
a	商品の變態	二〇三
b	貨幣の通用 <small>ヒムラケツ</small>	二一九
c	鑄貨、價値表章	二三六
第三節	貨幣	二四七
a	貨幣退藏	二四八
b	支拂手段	二五六
c	世界貨幣	二七〇
	譯者あとがき	二七九



第一卷第一冊 資本の生産過程



我が忘れ得ぬ友

プロレタリアートの大膽忠實にして
高貴なる選士

ヴィルヘルム・ヴォルフ

に捧ぐ

一八〇九年六月二一日タルナウに生まれ、一八六四年五月九日亡命のうちにマンチェスターに逝く。



第一版の序文

私が讀者に第一卷を提供せんとするこの著作は、一八五九年に公にした私の著書『經濟學批判』の繼續をなすものである。初篇と續篇との間の永い中絶を餘儀なくしたものは、私の仕事をいくたびか中斷させた永年にわたる病氣である。

右の舊著の内容は、この第一卷の第一章に要約されている。この要約は、關聯を明かにし遺漏なきを期したためにのみなされたのではなかつた。敘述が改善されたのである。とにかく事情が許す限りは、以前にたい示唆しただけに終っている多くの點が、こゝでは更に展開されている。他方、逆に舊著で詳細に展開されたものが、この著ではわずかに示唆だけにとどまっている場合もある。價值理論と貨幣理論の歴史に關する諸節は、新著では勿論全部除いた。しかし、舊著の讀者は、第一節の註で、これらの理論の歴史に對する新たな資料の提供されているのを見られるであらう。

何事も初めがむずかしい、という諺は、すべての科學に適用される。第一章、特に商品の分析を含んでいる節の理解は、従つて、最大の障害となるであらう。そこで價值實體と價值

量との分析をヨリ詳細に論ずるに當つては、私はこれを出来るだけ通俗化することにした。^{註一}
完成した態容を貨幣形態に見せている價值形態は、極めて無内容であり、單純である。ところが、人間精神は二〇〇年以上も昔からこれを解明しようとして試みて失敗しているのに、他方では、これよりはるかに内容豊かな、そして複雑な諸形態の分析が、少くとも近似的には成功しているというわけである。何故だろうか？ 出来上った生體を研究するのは、生體細胞を研究するよりやさしいからである。その上に、經濟的諸形態の分析では、顯微鏡も化學的試薬も用いるわけにいかぬ。抽象力なるものがこの二者に代わらなければならぬ。しかしながら、ブルジョアの社會にとっては、勞働生産物の商品形態又は商品の價值形態は、經濟的細胞形態である。素養のない人にとっては、その分析は徒らに小理窟をもてあそぶように見えるかも知れない。事實上、この場合問題のかゝわる所は細密を極めてゐる。しかし、この場合、たゞ顯微鏡的解剖にかゝわる問題が同様に細密を極めると少しも異つたところはない。

註一 F・ラッサルのシユルツェーデーリツチを駁した書の一節は、自らそれらの諸問題に關する私の論述の『精神的精髓』を再現したにとゞまるものであることを聲明してゐるのだが、この一節すら重大な誤解を含んでゐるだけに、この通俗化がなおさら必要と思われたのであつた。序ながら、F・ラッサルは、彼のいろ／＼な經濟的勞作の、例え

ば資本の歴史的な性格、生産諸關係と生産様式との關聯、等々に關するすべての一般的理論的命題を殆ど言葉通りに、私の案出した専門用語に至るまで、私の諸著から取り、しかも典據をかゝげていないのであるが、このやり方は、恐らく宣傳の點を顧慮してなされざるを得なかつたのであろう。勿論私は彼の細部の論述や適用方法について述べているのではない。これらのことは私の少しも關する所ではないのである。

【譯者註】なお、『通俗化することにした』という文句と『完成した態容……』の間には、『資本論』第一版には左のような一節がある。この一節は再版以後に收められた第一版序文では取りのぞかれてゐる。本譯の底本であるアドラツキー版にも省かれてある。尤も第二版以後では本文の敘述が改められ附録が無くなつてゐる。

『價值形態の分析においては事情は異なる。それは、辯證法が最初の敘述におけるより遙かに鋭くあらわれてゐるから、理解に困難である。それ故に私は、辯證法的思考にあまり慣れていない讀者には、一五頁（上から一九行目）から三四頁の終りまでの一節をすつかり省略すること、その代りにこの卷に附け加えられてゐる附録「價值形態」を読むことを勧める。そこでは問題をその科學的な言い方が許す限り簡單に、また學校教師風にすら敘述しようとして試みられてゐる。附録を読み終つたならば、讀者は再び三五頁から本文を読み続けられたい。』